山間地域の児童を対象として、

3　わくわく交流事業の実施

【実 施 日】 長期休業中 （夏休み期間）10回実施

【実施内容】 日頃ふれあうことのない他地域の子どもたちや外国人青年との交流

わくわく交流事業の特徴

1、都市部の子どもたちや外国青年との野外活動を通じた交流キャンプを具現化。

2、安全管理を徹底している。危険箇所の毎回の点検。
フリータイム、刃物、水、火を扱う時間帯は最新の注意を図った。

3、時間を気にすることなく、子どもたちはのびのび活動できる。

成果

1、都市部の子ども達と交流することで、郷土意識育成に連鎖した。

2、強調協力意識が互いに育成できた。

3、外国青年と接することは、意識の壁もなくスムーズに活動に参加できた。

4、宿泊を伴うプログラムは、急激に親しくなる効果があるのか、友達作りのきっかけとして最高の場所となった。

課題

1、近隣での開催だが、送迎が出来ないという理由から参加できない子もいた。
乗り合いで来る子もいたが、協力体制を構築してゆくことが課題か。

2、村の中心地より離れている地域のため、野外活動も含めた児童クラブ的役割を担う機関を行政との連携で、構築できたら、参加もしやすい環境整備が出来るのだが。

活動カレンダー

8月	2日	3日	4日	
8月	8日	9日	10日	
8月	13日	14日	15日	16日

わくわく活動の進行時間帯

9:00	9:30	11:30	12:00	13:10
集合　オリエンテーション	午前の野外活動	昼食自炊	昼食	午後の野外活動

16:00	16:30	17:30	18:00		21:30
休憩	ドラム缶風呂火たき	夕食つくり	片付け	お風呂	夜子ども会議　テント泊

＊活動内容＝野外での活動とした。
山の散策、、自炊、ドラム缶風呂、畑作業、鶏の世話、川遊び、プール

交流―1

交流―2

交流―3

村のプール

集合

なた、レクチャー

あいさつ

染物

染物

友達できた！

友達できた！

友達できた！

指導者とパチリ

餅つき

名物ードラム缶風呂

寝袋干し

鶏の世話

農作業

農作業ー収穫

山林地散策

みんなでやっほー

平成20年度　放課後子ども活動支援モデル事業活動カレンダー

子ども教室、放課 28回

週末サポート　　14回

わくわく交流事業　10回

会議　　8回

7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
	1	1	1	1	1	1	1	1	
	2	2	2	2	2	2	2	2	
	3	3	3	3	3	3	3	3	
	4	4	4	4	4	4	4	4	
	5	5	5	5	5	5	5	5	
	6	6	6	6	6	6	6	6	
	7	7	7	7	7	7	7	7	
	8	8	8	8	8	8	8	8	
	9	9	9	9	9	9	9	9	
	10	10	10	10	10	10	10	10	
	11	11	11	11	11	11	11	11	
	12	12	12	12	12	12	12	12	
	13	13	13	13	13	13	13	13	
	14	14	14	14	14	14	14	14	
	15	15	15	15	15	15	15	15	
	16	16	16	16	16	16	16	16	
	17	17	17	17	17	17	17	17	
	18	18	18	18	18	18	18	18	
	19	19	19	19	19	19	19	19	
	20	20	20	20	20	20	20	20	
	21	21	21	21	21	21	21		
	22	22	22	22	22	22	22		
	23	23	23	23	23	23	23		
	24	24	24	24	24	24	24		
25	25	25	25	25	25	25	25		
26	26	26	26	26	26	26	26		
27	27	27	27	27	27	27	27		
28	28	28	28	28	28	28	28		
29	29	29	29	29	29	29			
30	30	30	30	30	30	30			
31	31		31		31	31			
1	1	4	4	4	3	4	4	3	28
0	0	4	2	4	2	1	1	0	14
0	10	0	0	0	0	0	0	0	10
1	1	1	1	1	1	0	1	1	8

平成20年度 「総合的な放課後対策推進のための調査研究」事業を振り返って
その1

特定非営利活動法人　あぶくまエヌエスネット
理事長　進士　徹

過疎中山間地域においての子ども社会は、日常限られた人と接するだけです。 首都圏のように放課後、児童館、児童クラブや塾、お稽古やスイミング等に行くことはまずありません。
集団下校をする日々です。
全校生徒20人の小規模学校が、地区に存在する意味はとても大きいのです。
単に子どもの人数が少なくなり、仮に20人から15人、10人程度になったとしても廃校にする答えは簡単には出せません。地域で学校が存在するということの意味の大きさは、都市部と比較は出来ませんが、中心的な役割を持っているのです。

そんな小規模学校での「放課後子ども活動支援モデル事業」を実施してきました。
長所と短所がそこには存在しますが、限られた人との接点を、今事業をきっかけにいっきに国際交流まで引き上げてしまおうと！事業展開をしたのです。
急な連携協働をとるのは難しく、わがNPO法人の活動蓄積の中で構築してきた様々な連携をこの事業に活かしながら進めてゆきました。
地域連携はもちろんですが、首都圏からのNPO法人　NICEの国際協力ボランテイア団体と特に強化連携をとることで、スムーズに事業を具現化できました。また国際学園せいさ高等学校も協力関係にありました。

事業は3つの柱を立てました。①子ども教室「放課後自遊教室」の実施　②週末地域サポート事業の実施　③わくわく交流事業の実施

内容＝里山の環境を最大限に活用しながら、大地にしっかりと根を下ろした内容に努力しました。郷土の心を育てたい！という願いです。それは遊びという段階からステップを踏み、徐々にスキルアップする活動に発展できるよう連携協働というスタイルを保ちながら遂行してゆきました。

子どもにとって、外国人青年や支援してくれる多くの人とコミュニケーションをとりながら様々な体験を積み重ねることは、成長が著しい小学生時にそのような場を踏むことは、今後の成長過程にプラスに役立つものと考えております。

より持続的な活動として、文部科学省は今後もこのような放課後対策に支援協力体制を整備簡素化し、多様性にとんだ展開が出来るようお願い申し上げます。
この地域の子どもたちはとても純朴で素直です。山間にある環境は純粋な心を育つ最適な環境にあります。

冬は厳冬の地でもあります。自然の厳しさ恩恵を感じる地です。この地域をこよなく愛せる子どもの育成事業として本事業の意義と成果の大きさはここにあると感じています。

平成20年度 「総合的な放課後対策推進のための調査研究」事業を振り返って
その2

特定非営利活動法人　あぶくまエヌエスネット
理事長　進士　徹

総合評価
　とにかく子どもが社交的に成長しつつあること。これだけでも大きな事業成果と感じています。
また関わった外国人青年においても、山村の子どもたちと接する中で彼らも人的なスキルアップに連鎖していった点です。

　あぶくまNSネットには「生涯体験交流共育」という活動事業を蓄積する中から生まれた独自の言葉があります。
「共に育つ共育」はまさに生涯学習の分野にぴったりではないかと自負しています。
対象となる子ども・・・指導側になる大人・・・事業をコーデイネートするNPOメンバー
それぞれが育つ環境が何よりも大切であると思うのです。

この事業を通じて一人でも元気な子どもを地域ぐるみで育成することは、単年度消化の事業ではなく、時間はかかりますが、子どもの成長と共にある必要な事業だという認識をしています。

　また元気な子どもはこの地域で育てたい！という思いです。
元気良くそしてこの環境が、地域が大好き！！育つことが、活気ある地域つくりにも貢献し過疎の地域でありますが、最近聞くようになった「限界集落」という恐ろしい言葉は消滅するのではないかと思います。
将来我々といっしょにこの事業に参加した子どもたちが、地域で育ち今度はメッセージを伝える側になってくれることが次世代へのバトンタッチであり、期待することでもあります。

課題：地域全体がスクラムを組むことが必要。 次代に引継ぎ、地域全体が子どもたちのこのような活動支援はまだまだ行政であったり、公民館事業などという考えも根強くある。

NPO法人が地区でこのようなかかわりを保ちながら、子どもたちのプログラムを展開しましたが、発展途上の過程にあります。持続的に継続し、関わる大人と子どもの関係だけではなく、村全体、日本の中山間地域の放課後におけるひとつの指標として考えていただき、今後の継続的に我々は関わりを構築してゆく所存です。

日常の親が発するメッセージが実はとても大切！この地域が好き、農業に誇りを持っている！など親の背を見て子は育ちます。プラスのメッセージの逆であると、成長と共にこの地を離れてゆくことになることに気づいてほしい点です。難しい問題です。
しかしながら徐々にこの活動を続けることにより、親自身が気づき地域に誇りと、愛を多く子どもたちに注ぐ活動にして行きたいです。
決してあきらめることなく・・・・